

顕昭判詞にみる先行表現撰取の方法に対する認識

—「千五百番歌合」を中心に—

山 崎 真 克

はじめに

顕昭の歌合判詞の特徴としてまずあげられるのは、「萬葉集」を始めた和歌集は勿論のこと、物語・漢詩文等からも典故となつた和歌・文言等を数多く引用しつつ、先行表現の撰取を指摘する発言が多いことである。判者としての経験を重ねることにこうした発言が増える傾向にあり、晩年の「千五百番歌合」判詞においては特に顕著にみられる。

こうした点には早くから先学によって目が向けられている。能勢朝次氏は、「千五百番歌合」の顕昭判詞について「顕昭の判詞に於て先づ目につく第一の特色は、彼が古歌を豊富に引用することである」と述べ、その上で、古歌の引用によって「其の判すべき歌の表現様式が、それに類似して居る古歌に比べて、すぐれて居るか劣つて居るかを判定する尺度として用ひること」、また「彼が俊成と同

じく、新しい表現の背後に古歌の風情を裏つけて、餘情餘韻の廣がりゆたけさを感じて居ること」などを指摘された¹⁾。

また岩津資雄氏は、「顕昭の判詞は博引傍証、考証綿密をきわめ、幾多の歌論の問題に及んでいる点で、この歌合せ中の圧巻である」とし、中でも「風情の自由と新しさを庶幾」して「万葉集や物語を本歌に取ることをみとめた」点に特徴があると指摘された²⁾。

これらの指摘は、判定の際の批評基準や撰取を容認する先行表現の範囲等にふれていて非常に有効なまとめではあるが、全体としては顕昭判詞の注釈的・考証的性格をおおまかに捉えるに留まり、顕昭の先行表現の撰取に対する認識を具体的に明らかにした論にはなり得ていないと思う。

こうした状況の中で、安井重雄氏は、「新風の象徴的な技法とみられる本歌取の批評の場こそ、顕昭にとつてはみずから培ってきた用例主義の注釈・研究を発揮する最高の場であつたに違いない」と

して、『千五百番歌合』顕昭判三例(千二百七番左右、千二百十二番左、千二百四十九番左)を取り上げ、顕昭の先行表現撰取に関する指摘を具体的に検討した上で、顕昭の発言の特質についてまとめられる。すなわち、顕昭の指摘は歌の内容ではなく「詞の典故としてだけの本歌(?)の指摘」であり、また「歌の詞の組み合わせや言い換えの面白さという視点からなされている」指摘であると、**「顕昭は詞に添う情調や映像をみておらず、詞そのものの組み合わせの面白さに本歌取の効果をもているのである」と述べられた。**そしてさらに、**「顕昭の和歌実作における営為との関わりにもふれて、」**顕昭が以前から歌の実作について行ってきた、古語の自詠への切り入れも方法としては同じである」とされた。

この安井氏の検討は実に詳細なものであり、判詞中に詞の典故を指摘する例が顕著にみられる点や、和歌実作における営為との共通性も視野に入れておられる点は首肯すべきであるが、**「顕昭の先行表現撰取に関する指摘はこうして側面のみを持つものではない。批評する当該歌の心(発想・趣向)の典故となった先行表現を指摘する例なども多くあり、また先行表現撰取の方法・範囲・効果について」**のさらに別の発言もみられるのである。

そこで、『千五百番歌合』を中心にして、先行表現の撰取に関しての批評を検討することにより、**「顕昭の先行表現撰取に対する認識、具体的には先行表現を撰取する方法・範囲・効果をどのように捉え**

ていたかを探ることを行いたいと思う。というのは、この問題が顕昭歌論の特質を明らかにする上で欠くべからざる重要な課題であると思われるからである。そしてまた、いわゆる狭義の本歌取という詠作上の手法が俊成・定家等によって主張及び確立され、『新古今和歌集』の特徵の一つとまでなった時期においての顕昭の位置を照らし出すための指標ともなりうると思われるからである。すなわち、これまで御子左家的な批評語の使用が認められる点などにより、**「顕昭が新風への接近をはかったとされている『千五百番歌合』において、先行表現の撰取に関する発言はいかなるものかという問題を考察することで、顕昭の立場がより鮮明になると考えられるのである。」**本稿では、まずその第一段階として、**「先行表現撰取の方法について指摘している判詞を取り上げ、顕昭の方法に対する認識を明らかにしたいと思う。」**

今、狭義の本歌取と述べたが、これは定家の『近代秀歌』「詠歌大概」にみられるような、明確かつ厳密な方法意識に基づく手法を指している。この手法はあくまで俊成・定家によって確立されたものであり、それ以前のもの、或いは同じ時期であっても俊成等の御子左家以外のものと同一に扱ふことは避けねばならない。そこで本稿では、新しい作品を創作するために、古い表現——和歌に限らず物語・漢詩文等を含めて——を撰取する営為を「先行表現(の)撰取」と呼ぶこととして考察を進めていく。

一 摂取した先行表現の種別

先行表現摂取の認定は、統一的・普遍的な基準がはつきりしておらず、実に困難なものであり、研究者によって認定にばらつきが生ずることも十分に考えられる。当面の顕昭の先行表現の摂取に対する認識を探るといふ課題においては、判詞中で顕昭が問題にしている点に沿う形で顕昭の主張を読み取っていくことが必要となる。従つて、これは詠作主体の意識と厳密に一致するわけではない。

藤平春男氏は、定家・長明・順徳院の著作にみられる諸論及び『井蛙抄』巻第二「取本歌事」における实例に即した方法面からの分類を考察し、詠作主体の意識を考慮に入れて次のように本歌取の本歌の種別を整理された。¹⁾

A 本歌 詞の取り方や本歌をどのように新作歌がとりいれているかを検討して、作者が意識して特定の歌を取っており、かつ取ることによつて新作歌の形成する作品世界に参与せしめられていることのあるあきらかな場合、を本歌取と認め、取られた特定の歌（原則的に一首。二首の場合もある。）を本歌とするということになる。

B 参考歌（甲） いわゆる「心」を取る場合はしばしばこれに属する。（中略）これは特定歌を発想源とする場合で、「乙」が慣用歌句を用いるのと区別して「甲」とする。

C 参考歌（乙） 主として伝誦歌に慣用された歌句を用いた場合で、必

ずしも原歌を特定しがない場合があり、広義の本歌取にも属さないことが多い。

また川平ひとし氏は、さらに享受者の意識をも考慮に入れて、定家の歌合判詞にみられる「本歌」の用法について「i 本歌 本歌の心」「ii 本歌とす」「iii 本歌を思ふ」の三つに類別し、それぞれ次のように述べられた。

i 詠作主体が踏まえ、且つ享受者によつて想起されるべき「本歌」の作品時空。

ii 想起された「本歌」を新たな作品の中に摂取する詠作主体の行為。

iii 「本歌」の作品時空を詠作主体ならびに享受者が想起するという行為。

ここで顕昭判詞にみられる「本歌」の用法をみてみると、

① 千二百一番 左 勝

女房

2400 ながむればこぬ人またるわびつ、もこよひの月にあかずかもねん

判申云、左歌は、「月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらんわびつ、もねん（古今・恋五 775 不知）」と申歌のこ、ろにこそ待めれ。「雨もふらなん」のことばをすて、ひとへに「こよひの月にあかずかもねん」と侍、おそらくは月を詠心もふかく成て、本歌よりもまさりてこそきこえ待めれ。…とあるように、「i 本歌」に属するものがほとんどだが、「本歌」という語を用いずに先行表現摂取を指摘した例を含めると、「ii 本歌とす」「iii 本歌を思ふ」についても、それぞれ「ひとへに万葉を

本として……とよみつゝけ侍らんときは」(千二百七十六番左)、「右の歌、ともに……と侍歌をおもはれて」(千二百四番左右)などの例がみられ、定家の場合と同様の整理が行えるようである。

但し、これら以外に、次にあげるように詠作主体ではなく享受者(判者)のみが先行表現を想起していると思われるものもある。

②千二百十六番 左 持

女房

2430 君はしるやまつよあまたにつもりきて袖に有明の月をみるとも

左歌、上句に、「待夜あまたにつもりきて」と侍、柿本人丸が、「たのめつ、こぬよあまたに」(拾遺集・恋三・八九〇拾遺抄・

恋上 284 同)とよめることばおもひ出られ侍り。下句は、伊

勢の御が、「あひに逢てものおもふ比のわが袖にやどる月さ

へぬる、がほなる」(古今・恋五・756 伊勢)とよめる歌、面影に

立侍に、「袖に有明の月をみるとも」とさへはべる、いよ

く月の前恋、きはまりぬる事にこそ侍めれ。……

先行表現を想起して、詞の一致ではなく、発想や趣向の面で類似を指摘しており、①などに比して詠作主体の意識を問題にする度合いは低いのではないかと思われる。

またその他に、語の用法が先行例と異なると指摘する場合において、その主張の根拠を示すために正しく用いられている歌を証歌として引用する例もある。この場合はますます詠作主体の意識を問題にする次元からは離れていくであろう。

これらのことを踏まえて、本稿では、顕昭の先行表現の撰取に対する認識を探るといふ目的に照らし、判者顕昭の指摘に沿う形で先行表現の種類を次のように分類する。

A本歌 詠作主体が意識して撰取していると判者が認めたもの。やや断定的でないもの(A)も含む。

B類歌 詠作主体の意識に関わらず、判者が類想であると認めたもの。

C証歌 詠作主体の意識に関わらず、判者の主張の根拠としてあげたもの。従来、顕昭判詞が実証的、あるいは歌学的知識に基づくこととされてきたのは、主に「C証歌」に属する例を取り上げることであつたと思われる。これらからは撰取の範囲、撰取した語の用法について等の面が明らかにできると考えられるが、撰取の方法や効果についての顕昭の見解を探るには「A本歌」「B類歌」に属する例の検討が必要である。今回は特に方法についての認識を考察したいので、撰取を確実に指摘する「A本歌」の例を中心に取り上げる。

二 撰取の方法を示す語

前節に示した分類に即して、顕昭判詞において指摘された先行表現撰取の例を整理したものが次頁に掲げる「表」である。顕昭が加判を担当した恋二・恋三の一五〇番三〇〇首のうちの実に約六割にあたる一八三首について、先行表現撰取に関する指摘がみられる。一首について複数の先行表現が指摘されることもあるので、総計は

批評対象の歌数よりも多くなっている。なお、「A本歌」欄における()内の数値は、「A本歌」としたもので、やや断定的でないもの(A)の用例数を示す。

A 本歌 (A)	B 類歌	C 証歌	計
156 (25)	20	72	248

【表】千五百番歌合「頭昭判詞において指摘された先行表現摂取例

この【表】をみると、先行表現摂取に関する指摘のこれも約六割が「A本歌」についてのものである。「B類歌」「C証歌」については稿を改めて詳述する予定だが、概略を示せば、「B類歌」「C証歌」の指摘は、先行表現との一致の様相は「A本歌」と類似した傾向をみせるが、断定を避ける度合いのかなり強い点は大きく異なる。また、「C証歌」の指摘には大きく分けて評価に関わるものとそうでないものがあり、評価に関わる場合には、先行例が存すること、もしくは先行例と意味・用法が一致することが最大の条件となっているようである。

さて、「A本歌」についてであるが、「…とある歌のこ、ろにや。たとひその本歌ならずとも…」（千二百十二番右）、「若此歌の心歎。さらぬにても…」（千二百卅五番左）という疑問形を含んだものやや断定的でないものに類別してAとした。これらの例を含めて、摂取を指摘する際の表現をみると、単に「…と侍り」（千二百卅八番右、ほか2例）「…の歌に侍り」（千二百八十七番左、ほか9例）

「…と侍歌の心にこそ」（千二百廿三番右、ほか24例）などとして先行表現を引用する例もあるが、「…をおもふ」（16例）「…をとる」（15例）「…につく」（10例）「…によす」（4例）「…をこひねがふ」（2例）などの語によって摂取をより明確に示すものもみられる。

さらに、次におけるような、単なる摂取の指摘に留まらず、具体的方法にまで踏み込んだ言及も多くみられる。

③千二百七番 右 持

家隆朝臣

2413 おもへども人のこ、ろの浅茅生にをきまよふ霜のあへずけぬべし

右歌は、「ありつ、も君をはまたん打なびきわがぐるかみに霜のをきまよふ（萬葉卷二・87・磐姫皇后）」といへるおはりのこと葉を、「きまよふ霜の」とよみなされて、又「ひるはおもひにあへずけぬべし（古今・恋二・470・素性）」とあるをはりのことばをひきうつされたり。…

ここで注目したいのは、頭昭が摂取においての本歌からの変化の有無を認め、それをそれぞれ別の語によって示している点である。すなわち、当該歌第四句では萬葉歌の詞を変化させて摂取していることを「よみなす」という語で示しているのに対し、当該歌結句では古今歌を変化させないでそのままの形で摂取していることを「ひきうつす」という語で示している。頭昭はこうした語の使用を、かなり自覚的に行っていたものと考えられるのである。

本稿では、このような具体的方法について言及する際に用いられ

た語を手がかりに、顕昭の認識する撰取の方法を考察したいと思う。以下にあげるように、こうした撰取の方法を示す語による整理を行うことで、顕昭が認識していたと思われる方法を概観することができ。指摘の際に用いられた語が複合動詞である場合は、後項の動詞によって整理を行っている。なお、本稿末尾に顕昭の認識する撰取の方法を示す用例を一覧しているので、適宜ご参照いただきたい。

◎本歌からの変化を認めるもの

- ・「かふ」系―「かふ(5)」「いひかふ(1)」「よみかふ(1)」「なす」系―「なす(6)」「とりなす(4)」「よみなす(9)」「かへなす(1)」「むすびなす(1)」
- ・「なほす」系―「なほす(1)」「ひきなほす(1)」「すんじなほす(1)」
- ・その他―「とりちがふ(3)」「ことはをすつ(2)」「ひきうつす(1)」「とりあはす(1)」「おく(1)」「よみおく(1)」「ひきうつす(1)」

◎本歌からの変化の無いことを認めるもの

- ・「うつす」系―「よみうつす(1)」「ひきうつす(1)」
 - ・その他―「よみおく(1)」「よみおく(1)」
- ◎別の心もしくは詞の添加を認めるもの
- ・「そふ」系―「そふ(1)」「よみそふ(6)」「くはふ」系―「くはふ(1)」「よみくはふ(1)」
 - ・その他―「たちいる(1)」「よみつく(1)」「よみうつす(1)」「おく(1)」「よみおく(1)」「よみおく(1)」「よみおく(1)」

◎二首を合わせたの撰取を認めるもの

- ・「あはす」系―「とりあはす(4)」「ひきあはす(1)」「その他」―「とりわく(1)」「とりそふ(1)」「よみそふ(1)」「おく(1)」「おく(1)」「おく(1)」「おく(6)」

◎配置に着目するもの

従来、このような語に着目して先行表現撰取の指摘を考察することはほとんどなかったが、本歌合の顕昭判詞の場合には、多少の例外やこれらの語によらない場合も存するものの、顕昭の方法に対する認識を端的に示すものであると認めてよいと思われる。以下、それぞれの方法について典型例を示しつつ、そうした方法に対する評価についても考慮しながら検討を加える。

三 本歌からの変化を認めるもの

本歌からの変化を認める方法は、さらに心(発想・趣向)を変える方法、詞(特定の語句)を変える方法、置き所を変える方法の三つに細分化することができる。まず、心を変える方法とは、本歌の詞を利用しながら、また多少は変化もさせながら、一首全体としては別の心の歌に変えるというものである。例えば、

④千二百十九番 右負 定家朝臣

2427 尋みるつらき心のおくの海よしほひのかたのいふかひもなし

右歌は、伊勢よりみやす所の源氏のもとへたてまつる歌にい

はく、「伊勢嶋や塩干の方にあざりてもいふかひなきはうき世なりけり（源氏物語・須磨）」この歌の「伊勢しま」をかへて、「つらき心のおくのうみ」となされ、「しほひのかたにあざりてもいふかひなきは浮世なり」とあるを、「塩干の方のいふかひもなし」とかへられたり。「うきよ」のことばをすて、恋の歌につくられたるなるべし。…

とあるように、「源氏物語」須磨巻にみえる六条御息所の述懐の歌（但し、結句「わがみなりけり」の詞を利用しつつ、「うきよ」の詞を除いて全体としては恋の歌に変化させているものがこれにあたる。この方法を「ことばをすつ」という語によって指摘する例は、先にあげた④千二百一十一番左歌判詞にもみられる。

その他にも千二百四十番左歌判詞では、「古今集」雑下・70・業平歌を撰取していることを指摘して、「其心をととりて、さりげなくていもせのなからひによみなされて、あはれもふかく侍に…」と述べ、千二百五十八番右歌判詞では、「古今集」秋下・294・業平歌と同・恋三・629・御春有助歌の二首を撰取していることを指摘して、「…と申歌をとり合て、たくみに恋のうたをつくりいだせり」と述べるなど、こうした方法についての指摘がみられる。

本稿末尾の用例一覧をみると、千二百七番左及び④千二百十九番右の定家歌では評価についての言及が無いが、残る5例では「あはれもふかく侍」「たくみに」とあるなど肯定的評価が下されている。

こうした心を変える方法は、肯定的に捉えられていたと考えられる。次に、詞を変える方法についてみてみよう。先に述べたように、安井氏によって顕昭判詞の特質とされた方法はこれにあたる。安井氏が取り上げられた③千二百七番右歌判詞での萬葉歌の「霜のおきまよひ」を「をきまよふ霜の」と「よみなす」というのは、確かに歌の内容（心）には関連せず、「詞の典拠としてだけの本歌（？）の指摘」であり、「本歌と新歌との詞の組み替え、パズルを見るような感覚の指摘」であることは否めない。④にみえる「しほひのかたのいふかひもなし」と「かへ」たのも同様であろう。但し、次にあげるように、歌の心は変えずに詞を変化させるという例もみられる。

⑤千三百八番 左勝

前権僧正

2614 あらはれてうつろふ色のしるれば人の心のはなをみるかな

左歌は、「色みえでうつろふものは世中の人の心の花にぞありける（古今・恋五・797・小町）」と小野小町がよめる歌によせて、「いろみえでうつろふ物は世中の」とはべるを、「あらはれてうつろふ色のしるれば」となをされて、「人のこ、ろの花にぞありける」を、「ひとの心のはなをみる哉」とよみかへられたり。ことばも心もともに上下おなじさまに侍る歎。…

判詞末尾には、上句・下句ともに、それぞれ歌を構成する詞や心が同じであることを非難する文言がみられる。本歌の詞を利用し、微妙に変化させて撰取しているが、心は同じであるとの指摘と考え

られる。このように、安井氏の指摘が顕昭判詞の特質を捉えていることは間違いないのであるが、顕昭の認識していた方法は必ずしもこれだけとは限らないのである。

さらに詞を変えろの方法にはこのようなものもみられる。

⑥千二百三番 右 負

丹後

2405 とき知ぬ恋は富士のねいつとなくたえぬおもひに立煙かな

右歌は、伊勢物語に侍る、「時しらぬやまはふじのねいつとてかかこまだらに雪のふるらん(伊勢物語・第九段)」とある歌をおもひて、「山は富士のね」を、「恋はふじのね」とかへられたるにこそ。かゝるすぢの歌にとりてはあしくも侍ねど、歌合などにはいかゞ侍らん。左の歌をまさりなんと申べくや。

⑦千二百七番 左 持

宮内卿

身のほどにつ、むといはゞおのづからいとふになりぬ恋すしもあらず

左歌は、「月よ、しよ、しと人につげやらばこてふにたり
またすしもあらず(古今・恋四・692・不知)」といへる心をこひねがひて、「月」を「恋」になし、「またすしもあらず」を「こひすしもあらず」といひかへられたるにこそ。…

⑦は安井氏も取り上げておられる例である。「歌の詞の組み合わせや言い換えの面白さという視点からなされている」指摘とされるように、「山は富士のね」→「恋はふじのね」「またすしもあらず」

↓「こひすしもあらず」という変化は、一首の構成は変えずに、素材など詞の一部を言い替えるというものである。この他にも「あかずしてわかる、涙瀧にそふ…(古今・離別・396・兼基)」→「あかずしてわかる、涙袖にそふ…(千二百五十九番左・2516・具親)」という変化の指摘があるように、顕昭はこうした変化をかなり敏感に感じ取っていたようである。この方法についての評価は、肯定的・否定的まみちであり、特に傾向は見出せない。

続いて置き所を変える方法について考える。置き所とは、撰取した語句を一首の内に配置する場所のことを指す。顕昭判詞にも「これはたゞ三文字なれども、をきどころかはらねば」(千二百五十一番右)として用例が存する。次にあげる例は、安井氏も取り上げておられるものである。

⑧千二百十二番 左 負

保季朝臣

2422 思やれ草にもあらず木にもあらずたゞやは袖に露は置べき

左歌は、「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに吾身はなりぬべらなり(古今・雑下・959・不知)」と侍歌は、たけをば「木にもあらず草にもあらず」とよみて侍り。そのかしらむねの句をとりて、今歌のむねこしにをかれて侍る、本歌よりはしな、きやうにきこえ侍は、ひがおほえにや侍らん。…
詞をほとんどそのままの形で撰取し、句の順序を逆にして置き所を変える方法に対しては、本歌と比較すると「しな、きやうにきこ

え侍」と否定的に評価している。また、次の例では、

⑨ 千二百五十三番 右 勝

三宮

2505 うとかりしもろこし船もよるばかり袖のみなどをあらふ白浪

右歌は、伊勢物語に、「おもほえず袖に漣をさはぐらしもろ

こし船もよせつばかりに（伊勢物語・第二十六段）と侍歌乃上下句とりちがへられて侍歌。しかれど、ことばづかひなどあしからねばさて侍りなん。：

本歌の詞を撰取し、上句と下句に逆転させて配置していることを指摘した後は、逆接の関係を示す語によって「ことばづかひなどあしからねば」というやや肯定的な評価に続いている。従って置き所を変える方法については否定的に評価していると考えてよいであろう。

その他に「とりちがふ」の語によって置き所を変えることが指摘される千二百二番右歌判詞、千二百六十七番右歌判詞でも、明らかに否定的評価と見なしうる文言は示されていないもの、肯定的には評されていない。千三百廿三番左歌判詞にのみ肯定的評価がみられるが、これは後に検討する詞を添加する方法と共に評価されたもので、置き所を変える方法が肯定的評価の中心にあるわけではない。よって、こうした方法はあまり賞揚されていないものと思われる。

これまで本歌からの変化を認める三つの方法について検討を加えてきたが、こうした具体的な言及以外に、変化を単に捉えただけの指摘も存する。

⑩ 千三百廿三番 左 勝

前権僧正

2644 我涙よしの、河のよしさらばいもせの山の中にながれよ

左歌は、「ながれてはいもせの山の中におつるよしの、河のよしや世中（古今・恋五・不知）と侍歌は、大かたのいもせのなからひのありやうをよめる歌にて、古今の恋の歌のはてには入て侍とみゆるを、おかしくとりなされても侍かな。

本歌は、「よしの、川のよしやよの中」と侍に、今のうたは、「わが涙」をよみそへて、「吉野の川のよしさらば」といひ、本歌には、「ながれてはいもせのやまの中におつる」とあるを、今の詠に、「いもせのやまの中にながれよ」となされて侍。ゆゑ、しき心たくみ也。：

まず古今歌を「おかしく」変化させていることを肯定的に評価し、その上で、「よみそふ」の語によって後に検討する別の心もしくは詞を添加する方法を用いていることを示し、また、「なす」の語によって詞を変える方法を用いていることを示している。単に変化が認められることを述べた上で、具体的な方法について言及するといふ順で論述を行っているのである。

こうした指摘は「とりなす」「よみなす」の語によって行われているものがほとんどである。この他にも「よくとりなされてきこえ侍れど」（千三百八番右）、「おもしろうよみなされて侍にこそ」（千二百七十七番左）、「ふしぐよろしくよみなされて侍れば」（千

二百七十番右)などの例がみられる。これらの語は、こうした「おかくく」「よく」「おもしろう」「よろしく」などの語を伴って、本歌からの変化があることを肯定的に評す場合に用いられることが多い。

四 本歌からの変化の無いことを認めるもの

次に、本歌からの変化の無いことを認めるものについて検討する。

③千二百七番右歌判詞でみたような「うつす」系の語によって示される以外にも、特定の語を伴わずに指摘する例が数多くあり、それらは全体的にみて本歌との変化が無いことを否定的に評価するものである。この場合も、先にみた方法と同様に、心・詞・置き所それぞれについての指摘がみられる。

①千二百五十九番 右 負

俊成卿女

2517 おもひいで、鳴こそわたれ秋かぜにちぎりし空の初鴈の声

右歌は、「思いで、こひしき時は初かりの啼てわたると人はしらずや(古今・恋四・735・黒主)、是は、しのびにかたはへる人の家のあたりをまかるおりに、かりの鳴をき、て、黒主がよめる也。左は、「なをしの、め」、いかゞときこゆれど、右歌は本歌と心も詞もたがはぬやうに侍。仍為負。

古今歌の詞を利用しつつ、雁の鳴き渡る声に相手を想って嘆く心情を込める心を詠んだ当該歌は、あまりにも変化が無いと非難している。同様の評価は、千二百六十七番右歌判詞に「…と侍歌にあま

りにたがはずや侍らん。もとすまの詞のとりちがへられて侍ばかりにこそ」、千三百十六番右歌判詞に「…と侍に心詞たがはぬうへに」とある。また、千三百卅二番右歌判詞にも「心もことばもみなよみのせられて、私のしわざはすくなくや侍らん」とあるし、⑤千三百八番左歌判詞も直接的な文言はみえないものの、これらの例から考えれば否定的評価であることは動かないであろう。

心のみについての指摘には、千二百八十四番左歌判詞に「…と侍るうたの心をいえずや侍らん」、千二百八十五番右歌判詞に「下句はよみかへられたれど、おほ心はひとつすちにや」というものがある。また、詞についての指摘には、次のようなものがある。

②千二百九十一番 右 負

家隆朝臣

2581 あひに逢て物おもふころの夕暮になくやさ月の山ほと、ぎす

右歌は、五句ながら面白こそよみつゞけられて侍るめれ。「あひに逢て物思ころの」と侍二句は、伊勢がうた(古今・恋五・756・伊勢也。「ゆふぐれに」といふ腰の句は、斎宮女御の、「さらでだにあやしきほどの夕暮に(後拾遺・秋上・319・斎宮女御)」と侍歌、「なくやさ月の」は、万葉の、「子規鳴や五月のみじかよも(萬葉卷十・1981・不知)」と侍歌の一句、「山郭公」とはてたるは、躬恒がうたに、「くる、かとみれば明ぬる夏のをよあかずとや鳴山ほと、ぎす(古今・夏・157・忠岑)」、已上新歌として「文字もわが詞はべらぬ上に、させること侍らずや。…

第三句及び結句の指摘は幾分恣意的な非難の感があるが、顕昭としては第一・二句及び第四句に対する本歌からの変化が無いという非難を明確化するために、それぞれの句について典雅といえるような歌を博搜したのではないか。さらにまた、下句が完全に一致する歌に対してはかなり厳しく非難している。

⑬千二百卅九番 左勝

小侍徒

2476 たのむともいまはたのまじあふみぢのしの、をふゞき人はかり
けり

左歌は、催馬楽に、「近江路のしの、をふゞきはやひかすこ
もちまちやせぬらんしの、をふゞき(催馬楽・近江路)」と申歌
につきてよめるなるべし。：(俊頼朝臣が竹風如秋と申題に、
「秋きぬと竹のそのふになのらせてしの、をふゞき人はかり
なり(歌未奇歌集・327)」とよめるに末句同。如何。)

この他にも、千三百三番右歌判詞「已撰集の古歌也」、千三百九
番左歌判詞、千三百廿七番左歌判詞「下句の千載集の歌にて侍也」
すでに勅撰の歌の下二句、尤さらるべかりけるか」にも、同様の評
価がみえる。

次における置き所についての指摘は、本歌との重なりはほんの一
部ではあるが、顕昭はこれを積極的に取り上げている。

⑭千二百五十一番 右勝

寂蓮

2501 おもかけはくもる空だにあるものをうたてくまなくすめる月哉

右歌は、「いつしかと暮をまつまの天空はくもるさへこそう
れしかりけれ(拾遺集・恋二・722・不知)」と申歌の心にや。後拾遺
に隆家卿歌、「さもこそは都のほかのやどりせめうたて露け
き草まくら哉(後拾遺・隠旅・530・隆家)」、これはたゞ三文字なれ
ども、をきどころかはらねば、此詞によりてきよげにきこゆ。
又ふるしとも申つべし。但、あまりの事か。詞づかひなどよ
ろしくみゆれば、右まさるとも申侍ぬべし。

顕昭も「たゞ三文字なれども」と述べて、重なり度合いが低い
ことを自覚している。この詞によって肯定的評価の「きよげ」にも
なり、否定的評価の「ふるし」にもなるとする。最終的にはこうし
た評価に重点を置かず、「詞づかひ」の点からみて当該歌に勝の判
定を与えている。先にみた詞を一部変える方法の場合のように、か
なり敏感にこうした詞や置き所の一致を感じ取っていたようである。

五 別の心もしくは詞の添加を認めるもの

次に別の心もしくは詞を添加する方法についてみていくことにす
る。これは、本稿末尾にあげたように「そふ」系・「くはふ」系の
語によって示されることがほとんどである。

⑮千二百五十八番 左持

良平

2514 あひみてもなこりおしまのあま人はけさのおきにぞ袖ぬらしつる

左歌は、「松しまやをしまがいそにあさりせしあまの袖こそ

かくはぬれしか（後拾遺・恋四・重之）と後拾遺のうたにて侍り。それにて後朝の心をよまれて、「けさのおきにぞ袖ぬらす」などそへられて侍り。…

これは、本歌の心及び詞を撰取した上に、後朝の別れの心を加えて、「けさのおきにぞ袖ぬらしつる」と詠んだものである。別の心を添えた例と言える。同様の方法は、千二百卅六番右歌判詞、千三百十番右歌判詞にも指摘がみられる。

また、次における二例はともに本歌を撰取した上で、別の詞を添加したものである。

⑮ 千二百五十番 右勝

雅経

2498 やどるとて月になみだをまかせてもくちなはいかに袖のしがらみ

右歌も、さきに申す伊勢が、「やどる月さへぬる、がほなる（古今・恋五・756・伊勢）と申歌に、「くちなはいかに袖のしがらみ」などよみそへられて侍るが、ともにおもはれたるところ、よし侍れど、左の、「あさ霧の八重たつなみ」、猶き、つかぬやうに覚侍れば、右を勝と申べし。

⑯ 千三百廿一番 右負

寂蓮

2641 さゆるよのうきねの霜を打はらひ鳴なるをしも我ばかりやは
右歌は、「よをさむみねざめてきけばをしぞ鳴はらひもあはずしもやをくらん（後撰・冬・478・不知）」などよめる上に、「我ばかりやは」など、一詞くはへられたるばかりにや。「なくな

るをし」なども、いかゞときこゆ。…

この他にも、千三百卅九番右歌判詞には「「程は雲井」の一詞をのせられて侍れど、すゑのよくよみくはへられて侍れば、ともによろしく持なるべし」、千二百六十一番右歌判詞には「…と申歌に、「わがまたしのぶ月ぞみゆ覽」とはよみそへられて侍れど、秀逸にはみえ侍らぬうへに…」という例がある。これらをもて分かるように、評価は方法に対するものではなく、添加した結果の一首の出来に依つていようである。

結果的な現象としては添加と同じであるが、顕昭の認識としてはやや異なるものが次における例である。

⑰ 千二百四十八番 右勝

通具朝臣

2495 とへかした尾花がもとの思草しをる、野べの露はいかにと

右歌は、万葉歌に、「みちのべの尾花がしたの思草いまさら（萬葉卷十・2270・不知）とはべる歌の胸こし

をとりて、さらに下句をよみかへられて侍り。…
先にみた、本歌を撰取した上で別の詞を添加するものと結果的には同じであるが、顕昭は「よみかふ」という語によつて指摘を行っている。本歌を撰取した上で、あとの部分の詞を変化させるといふ方法にならうか。この他にも、千二百八十五番右歌判詞に同様の指摘がみられる。さらに、「よみかふ」などの語は無いが、千二百廿七番左歌判詞の「はじめの二句「思ふ事しのべといまは」とばか

りあたらしく侍歎、千二百六十三番左歌判詞の「やどる月さへぬる、がほなる」と侍うたのかみのめつらしくなり侍にこそ」というのも、この方法とみなして良いものと思われる。

六 二首を合わせての撰取を認めるもの その他

前節で見たものは、一首の歌とさらに別の心もしくは詞を添加する、変化させるという方法であったが、二首の歌を合わせるという方法の指摘もみられる。この方法は、「とりあはず」という語によって指摘されることが多いようである。

①千二百六十一番 左勝

女房

2520 うつ、こそぬるよひくもかたからめそをだにゆるせ夢の関守

左歌は、「人しれぬわがかよひちの関守はよひくごとにもちもねな、ん古今・恋三・業平」と侍歌と、「あかでこそおものはん中にはなれなめそをだに後の忘がたみに古今・恋四・717・不知」と侍るうたと、「二をとりあはせられてたくこそ侍れ。」

この他、千二百六十八番左歌判詞の「ふるき歌ふたつをとりあはせてよまれて侍るにや」という指摘や、千三百廿二番右歌判詞の「上句は万葉の歌に、下句は伊勢物語にいりて侍、と申うたのことはをひきあはせて、よくこそいとなまれて侍れど」という指摘も同様であろう。また、指摘の語は異なるが、千三百十二番左歌

判詞の「此歌二首をとりわけて、今のうたの上下にをける歎」という指摘も、方法としては同じであると認めうる。

最後に、配置に着目する「おく」系の語についてみておく。これは本歌からの変化の有無とは直接にはつながらず、本歌から撰取した語句を新歌のどこに配置するかという点に関する指摘である。例えば、次のようなものがこれにあたる。

②千二百廿七番 左負

保季朝臣

2452 おもふことしのべどいまは名取河せ々の埋木あらはれにけり

左歌は、「名取川瀬々の埋木あらはればいかにせんとかあひみそめけん（古今・恋三・不知）、此歌の上三句をとりて、今の歌の腰より下三句にをかれて侍めり。はじめの二句「思ふ事しのべどいまは」とばかりあたらしく侍歎。：

この他にも⑧千二百十二番左歌判詞や、直前にあげた千三百十二番左歌判詞なども同様である。これらを見ると、本歌とあまり詞に変化が無い場合が多いようである。

これまで見てきた以外の方法に関する指摘としては、撰取したことを明らかに示すか否かという観点からのものがある。

③千二百七十三番 右負

俊成卿女

2455 待とだに人はわする、さ筵にいく夜かさねつ袖のかたしき

右歌は、「さ筵に衣かたしきこよひもやわれをまつらんうちのはしひめ（古今・恋四・689・不知）」といへるうたにつきて、「う

「ちのはしひめ」といふその名をばかくして、「待とだに人は
わする、さ筵」などはおかしく見たまふるに、結句の「袖の
かたしき」はいかゞ待らん。本歌は、「衣かたしきこよひも
や」とよみかけてはべればこそ聞にくからね。この「袖のか
たしき」はをよばぬこゝろにかたぶかれ待。よりて以左爲勝。

本歌にみえる「うちのはしひめ」を新歌には表さずに、「待とだ
に人はわする、さ筵」と詠むことで、待つ存在を想起させる方法
を肯定的に評価しているものと思われる。千二百卅二番左歌判詞の
「此うたの心を終句におもはせて、云さ、れていへる歎」という指
摘も同様のものであろう。しかし、あまりにも撰取したことを明ら
かにしないと、「ひとこと葉をとれるも心ほそくきこゆれば」（千
二百廿四番右）、「すこしかすかかや待らん」（千三百十二番左）と
して、否定的に評価されてしまうようである。

おわりに

以上、先行表現撰取の方法について指摘のある判詞を検討してき
た。具体的方法に言及する際に用いられた語による整理を行ったこ
とにより、従来、単に多くの古歌を引用する、詞の典拠についての
指摘ばかりであるとされてきたものが、それに留まらず多様な方法
に自覚的であったことが確かめられたと思う。また評価に関して
は、本歌から新歌へいかに変化させたかに最も関心が向けられ、心

を変える方法など、本歌からの変化のあるものを肯定的に評価し、
逆に心・詞・置き所などがあまりにも本歌と一致するものは否定的
に評価する傾向にあることが分かった。その他、撰取を明らかに示
すか否かにも注意を払っていることが認められた。これらのことか
ら、顕昭はかなり明確な方法意識に基づいて批評を行っていると思
めて良いものと思われる。

顕昭の先行表現撰取の方法に対する認識は、例えば心を変える方
法を肯定的に評価する点などをみると、俊成・定家等のものと全く
懸け離れているわけではないようである。これが新風理解の努力の
一環であることを示すものなのか、顕昭判詞における認識の変遷の
有無を確かめねばならないであろう。これらのことは、先行表現撰
取の範囲・効果に対する認識についての考察を行った上で、改めて
詳述したいと思う。

顕昭の先行表現撰取に対する認識を明らかに出来れば、顕昭の実
作における撰取方法との関連、或いは注釈における撰取の指摘の様
相との関連を考察していくことも可能である。残された課題は多い
が、ひとまずここで筆を措く。

(注)

- (一) 能勢朝次氏「六條家の歌人と其の歌学思想」(二)「国語国文の研究」25
昭和3・10。「能勢朝次著作集3 近世和歌研究」(思文閣出版 昭和58)
に所収。

(2) 岩津資雄氏「歌合せの歌論史研究」(早稲田大学出版部 昭和38)。

(3) 安井重雄氏「表現・思想の基盤としての注釈——顕昭(山本一編)「中世歌人の心 転換期の和歌観」世界思想社 平成4・9)。

(4) 藤井春男氏「新古今集の本歌取について」(「早大工高研究年誌」最終号 昭和41・12)、「新古今とその前後」(笠間書院 昭和58)。「藤井春男著作集 第2巻」(笠間書院 平成9)に所収。

(5) 川平ひとし氏「本歌取と本説取——へもとの構造——」(「新古今集とその時代」風間書房 平成3)。

(6) 本歌合の本文は、宮内庁書陵部本を底本とした、有吉保氏「千五百番歌合の校本とその研究」(風間書房 昭和43)に拠るが、明らかに底本の誤脱と思われる箇所は高松宮家本に拠って訂している。また、句読点等私に表記を改めた箇所もある。なお、判詞中に引用された和歌の歌番号等は、「新編国歌大観」に拠っている。

(7) 安井氏が「顕昭の新風に対する認識と姿勢」(「中世文藝論稿」12 平成元・3)において、「顕昭判詞の本歌指摘のひとつのあり方」として、「まをおもふ」(203右 1204左 1204右 1280左、「まをこひねがふ」(207左、「まをとる」(211左)の例を指摘しておられる。

(8) 谷山茂氏校注「日本古典文学大系「歌合集」(岩波書店 昭和40) 頭注に「浮世云々では述懐歌めくので、そういう詞を切り捨てて」とある。

(9) 「」内の本文は、高松宮本・桂宮本系統などの改判部分にみられるものである。なお、改判の過程については、拙稿「千五百番歌合」顕昭判における改判過程の再検討——書陵部本系から高松宮本系への改判の可能性——(「古代中世国文学」11 平10・4)を参照されたい。

【顕昭の認識する撰取の方法を示す用例一覽】

この一覽は、顕昭の認識する撰取の方法ごとに、それを示す用例を指摘の際に用いられた語と共に掲げたいものである。撰取に対して肯定的評価もしくは否定的評価が与えられている場合は、それぞれ(+)、(-)によって示した。また、末尾には単に撰取を指摘するのみの用例も掲げている。

◎本歌からの変化を認めるもの42例

- ・心を変える(7例)——1201左(+)「こばをすつ」 1207左(なす) 1219右「こばをすつ」 1233左(+)ひきうつつ 1240右(+)よみなす 1249左(+)かへなす 1258右(+)詞を変える13例——1207右(+)よみなす 1219右(+)なす 1219右(+)かふ 1226左(+)よみなす 1227右(+)よみおく 1227右(+)なす 1229左(+)よみなす 1268右(+)よみなす 1298左(+)ずんじなほす 1298右(+)かふ 1308左(+)なほす 1308左(+)よみかふ 1342右(+)とりあはず
 - ・詞を一部変える(6例)——1203右(+)かふ 1207左(+)いひかふ 1249左(+)かふ 1259左(+) 1263右(+)なす 1336右(+)置き所を変える(6例)——1202右(+)とりちがふ 1212左(+)おく 1248左(+)とる「す」 1253右(+)とりちがふ 1267右(+)とりちがふ 1323左(+)なす
 - ・単に変化を表すのみ(10例)——1206右(+)とりなす 1217左(+)よみなす 1218左(+)「よみなす」 1247左(+)むすびなす 1262左(+)とりなす 1270右(+)よみなす 1288右(+)よみなす 1298左(+)よみなす 1308右(+)とりなす 1323左(+)とりなす
- ◎本歌からの変化の無いことを認めるもの22例
- 1201右(+) 1207右(+)ひきうつつ 1212左(+) 1227左(+) 1239左(+)改(-) 1242左(+) 1251右 1259右(+) 1267右(+) 1272右(+)よみうつつ 1284左(+) 1285右(+) 1291右(+) 1303右(+) 1309左(+) 1316右(+) 1317右(+) 1321右(+) 1327左(+) 1328左(+)よみおく 1332右(+) 1308左(+)別(+)「よみそふ」 1233左(+)「よみおく」 1236右(+)「よみそふ」 1250右(+)「よみそふ」

1258 左「そふ」 1261 右(二)「よみそふ」 1262 左(+)「たちいる」 1272 右(+)「よみおく」 1310
 右(+)「よみつぐ」 1321 右(二)「くはふ」 1323 左「よみそふ」 1328 左(+) 1339 右(+)「よみく
 はふ」 1341 右(+)「よみそふ」 1341 右(+)「おく」

・本歌の一部を撰取した上で、あとの部分の心もしくは詞を要する(5例)

1227 左 1248 右「よみかふ」 1259 左(一)「よみうつす」 1263 左「めづらしくなる」 1285 右
 (一)「よみかふ」

◎二首を合わせたの撰取を認めるもの(7例)

1258 右(+)「よみそふ」 1258 右(+)「とりあはず」 1261 左(+)「とりあはず」 1268 左「とりあ
 はず」 1312 左「とりわく」 1322 右(+)「ひきあはず」 1337 左「とりそふ」

◎配置に着目するもの(6例)

1201 右(+)「おく」 1212 左(一)「おく」 1227 左「おく」 1280 左(+)「おく」 1312 左「おく」 1324
 右(+)「おく」

※単に撰取を指摘するのみのもの

「…と侍り」(3例) 1238 右 1246 右 1321 左
 「…の歌に侍り」(10例) 1247 左 1249 右 1254 左 1258 左 1287 左 1291 右 1296 左
 1296 右 1306 左
 「…と侍歌の心にこそ」(25例) 1201 左 1209 左 1212 右 1217 左 1223 右 1235 右 1239 右
 1249 右 1250 右 1251 右 1254 右 1265 右 1268 右 1270 右 1271 左 1284 左 1284 右 1291 右 1318
 右 1319 左 1319 右 1324 右 1329 右 1338 右 1349 右
 「…をおもふ」(16例) 1203 右 1204 左 1204 右 1205 左 1214 左 1215 左 1223 左 1238 左 1280
 左 1281 左 1291 左 1301 右 1308 右 1326 右 1329 左 1332 右
 「…をとる」(15例) 1201 右 1211 左 1212 左 1218 右 1224 右 1227 左 1234 右 1240 右
 1248 左 1248 右 1271 左 1286 左 1332 右 1338 左
 「…につく」(11例) 1227 右 1227 右 1232 右 1239 左 1239 左 1240 左 1241 右 1263 右 1273 右
 1315 右 1340 右
 「…によす」(4例) 1202 左 1203 左 1308 左 1314 右

「…をこひねがふ」(2例) 1207 左 1213 左

その他 15例 1219 右「このことをよまれたるなるべし」 1232 左「此うたの心を終句
 におもはせて云さ、れていへる歌」 1233 左「…と侍歌のこ、ろを、しはかり
 て」 1239 右「このうたをながめて」 1244 左「…とよめる歌のながれにこそ」 1248 左

「…と侍歌のさまにこそ侍るめれ」 1262 右「…と申歌にとりか、るべくは」 1268

左「かやうのこ、ろばへとも侍る歌」 1281 右「…と申うたのふるまひにこそ」

1294 右「…と侍中比の歌の心さまをばまねはれたれど」 1313 左「…と申歌の心ばへ
 なるべし」 1328 左「…と侍を伺て」 1334 右「…と申うたをこめいれて」 1338 左、上

句にむすびて」 1339 右「…の詞をのせられて侍れど」

——やまのこゝまごかつ、本学文学部教務補佐員——